

AEON MAGAZINE

For a Sustainable World

December 2023

Vol. 83



特集

未来を担う 子どもたち

見ごたえあふれるパラスポーツの世界
デフ陸上

デフリンピック、日本で初開催。
十種競技で出場を目指す



① 鋳型から出した製品を磨く職人。一つひとつ研磨機で丁寧に磨いていく ② 持ち手や蓋など、部品の数が多い ③ 出来上がった鉄瓶。つややかな鋳肌の黒が美しい ④ 溶けた鉄を鋳型に慎重に流し入れる

鉄器は、製品をデザインし、砂を高圧で固めた鋳型に高温で溶かした鉄を流してつくる。「及源鋳造」社長の及川久仁子さんによれば、「型はとても重要」だという。「型の砂の粒子が、鋳肌の状態を決めるからです。職人は砂を握り、水分量を見ながらつくりまします」。粗

江戸時代から岩手県・水沢（現奥州市）で、生活道具である銅や釜などの南部鉄器をつくってきた「及源鋳造」。その魅力は、なんといっても黒くつややかな美しい鋳肌だ。職人たちの確かな技術が、鋳肌の美しさを生み出している。

鉄瓶は、製品をデザインし、砂を高圧で固めた鋳型に高温で溶かした鉄を流してつくる。「及源鋳造」社長の及川久仁子さんによれば、「型はとても重要」だという。「型の砂の粒子が、鋳肌の状態を決めるからです。職人は砂を握り、水分量を見ながらつくりまします」。粗

出来上がったばかりの鉄器の色はグレーなのだ、と及川さんは言う。「南部鉄器の黒色は、錆止めの色なんです。鍋や釜などは、昔は漆を使って錆止めしていましたが、今は漆と成分が似ているカシューナッツの殻から採取した樹液を使った合成樹脂塗料を塗っています」。いっぽう、鉄瓶では錆止めの方法が異なり、鋳造後、900度ほどの高温で焼き締め表面に酸化皮膜をつくっている。「及源鋳造」では、その技術を鍋やフライパンなどに応用し、これまでにない鋳肌の南部鉄器を開発した。

及源鋳造株式会社 社長
及川久仁子
おいかわくにこ

岩手県生まれ。短大卒業後、デザイン研究所で勤務。1984年及源鋳造に入社し、鋳物の型造りから始める。2007年5代目社長に就任。「鍋釜屋」としての矜持を持ちつつ、常にアンテナを立てて、時代の雰囲気をつかむことを忘れない。



15年前からは、伝統的な手法で鉄瓶をつくる職人の育成にも力を入れている。「南部鉄器の産地として、新しいものに挑戦すると同時に、伝統も守っていきます」。温故知新。これからも進化する南部鉄器の未来が見える。

後世へとつながりゆく 日本カルチャーの 伝承者たち

Contents

02 後世へとつながりゆく
日本カルチャーの伝承者たち
Vol. 19 及川久仁子 後編

Feature

03 未来を担う
子どもたち

16 大いなる哲学を持ち、
エシカルな食の場を提供する
Sustainable Restaurant
Vol. 19
きじま みなとみらい店

17 イオン 幸せの黄色いレシートキャンペーン
壊れたおもちゃ、
私たちが治します!

18 見ごたえあふれるパラスポーツの世界
デフ陸上

19 シェフパートナーズ料理塾より
Vol. 19
セゴギキムチチョンゴル
(牛肉と豆腐のキムチ鍋)

AEON MAGAZINE
December 2023 Vol. 83

発行日：2023年11月15日
発行所：イオン株式会社 コーポレート・コミュニケーション部
〒261-8515 千葉県千葉市美浜区中瀬1-5-1
TEL：043-212-6061
ホームページ：https://www.aeon.info/
※本誌の一部を抜粋した英語版、中国語版を
下記ホームページよりご覧いただけます。
英語版 https://www.aeon.info/en/
中国語版 https://www.aeon.info/cn/

本誌上における社外からの寄稿や発言は、必ずしも当社の見解を表明してはいません。

表紙の和菓子

子どもと楽しむ伝承の遊び

作：井上 豪(東京マイスター、優秀和菓子職)
梅花亭 東京都新宿区神楽坂6-15
http://www.baikatei.co.jp

この冊子はイオンの情報誌です。
Aeon(イオン)はグループの総称です。



未来を担う



日本で初めて“こども”の名前を冠した「こども家庭庁」が発足し、社会全体で子どもや子育て世代を支えていこうという機運が高まっている。未来を担う子どもたちが自分らしく生きることができ、子育てもしやすい社会の実現のため、多くの取り組みが行われている。

今号では、こども家庭庁の初代大臣を務めた小倉将信さんにお話をうかがうとともに、子どもと子育て世代に向けて行政や企業が行う様々な事例を紹介する。

子どもたち

「こどもまんなか」の社会実現に向けて

2023年4月、「こどもまんなか」の社会を実現するために「こども家庭庁」が発足した。今、日本の子どもや若者を取り巻く状況や課題に対し、国としてどのように取り組んでいくのか。こども家庭庁の初代大臣を務め、現在は自民党の副幹事長である衆議院議員小倉將信さんにお話をうかがった。

日本は子どもの数こそ減っていますが、児童相談所への児童虐待の通報件数（2022年度）や不登校児童・生徒数（22年度）、いじめの件数（22年度）、子どもの自殺者数（22年）は、過去最多となっています。経済的に困窮している子どもや若者も少なくありません。

こうした現状を踏まえ、すべての子どもや若者に寄り添い、誰一人取り残さず支援するために設立されたのが「こども家庭庁」です。各省庁の垣根を超えた子どもや若者政策の司令塔となり、子どもや若者の視点を取り入れた政策を実行します。

安心して 子どもを持てる社会に

こども家庭庁の施策の柱のひとつは、少子化対策も含めた子育て世代への支援です。子どもを持つか持たないかは、個人の自由です。ただ、子どもがほしいと思った時に、収入や仕事を理由に諦めなくてもよい社会を

実現したい。そのために、①若い世代の所得を増やす、②男女ともに仕事と育児の両立ができるよう社会構造や社会意識を変える、③ライフステージに応じて切れ目のない支援を行う、という3つの基本理念を掲げています。

①を実現することで、経済的な理由で子どもを諦める人は減るでしょう。今年9月に岸田首相が発表した「年収の壁」の解消は、若い世代の所得向上や人手不足の解消を目的としていて、少子化対策の中でも議論されてきたものです。

②は、女性の家事・育児の負担を減らし、男女ともに仕事と育児の両立ができるように、男性育休取得の推進や保育園・学童保育の充実

などを進めるものです。子育てしながら働くことが当たり前という社会の意識変革も必要です。

ライフステージにおいて、妊娠してから子どもが成人するまで、それぞれの時期に必要な支援は異なります。③では、ステージに応じた支援を切れ目なく行うことで、子育ての不安を払拭したいと考えています。

スウェーデンやドイツ、フランス

では約8割の人が、自国を子育てがしやすい国だと思っていますが、日本では約6割の人がそう思っていないという調査結果が出ています。先日、新幹線の車内で子ども連れのご家族を見かけました。子どもは旅行が楽しくて大きな声で話しているのですが、親は周囲を気遣い「静かにしなさい!」と叱っています。これでは子どもも親も楽しくないですね。そういう

子どもや若者、子育て世代の声に
耳を傾け、受け止める。そこから
「こどもまんなか」の社会が
始まります。

場面に出合っても、顔を顰めるのではなく、笑顔で「大丈夫ですよ」「気にしないでいいですよ」と伝えられる社会がよいと思いませんか？ 小さなことですが、こうしたことを一つひとつ積み重ねていけば、安心して子育てができる社会になるのではないのでしょうか。

子どもや若者の声に耳を傾ける

こども家庭庁のもうひとつの柱は、子どもや若者への支援です。

今の日本の子どもや若者の一番の課題として私が考えているのは、自己肯定感の低さです。幼い頃から自分の考えや意見を表明する機会が少なく、また意見を言っても大人に受け止めてもらえないことが、自己肯定感の低さ、自信のなさにつながっているのではと考えています。

大臣になってから多くの子どもや若者と接してきました。虐待のトラウマに苦しんでいる子、不登校に悩みつつも夢をつかんだ子、自殺願望から立ち直った子、障がいがある子、児童養護施設で育った子……。彼らの話や意見をしっかりと聞いてみると、だんだんその顔が晴れやかになり、よい表情になってきます。

子どもや若者が自分の意見をはっきりと表明し、大人がしっかりと聞く。

それによって何かが変わるといふ体験を重ねれば、自分は周囲や社会に必要とされている、役立っていると思え、自己肯定感が高まるのではないのでしょうか。

そのためのひとつの取り組みが「こども若者★いけんぷらす」事業です。小学1年生から20代までのぶらすメンバーを募集し、彼らの声を聞いて政策に反映しようと考えています。あらゆる政策に子どもや若者の評価を取り入れることで、これまでとは違う視点が生まれることも期待しています。

「子どもの権利条約」に定められているように、子どもでも政治や政策に意見を述べる権利があります。子どもや若者も社会の一員だということを、私たち大人も理解しなければいけないのではないのでしょうか。

子どもや若者をめぐる課題が複雑化・多様化している今、行政だけで課題を解決することはできません。企



業やNPOなど様々な主体が同じテーブルに着いて連携し、子どもや若者の課題を解決することが望ましいと考えています。こうした動きが広がっていけば、世の中は変わるといふ確信が私にはあります。今は大臣という立場を離れましたが、子どもや若者がまんなかにいられる社会の実現に向けて、これからも活動していきたいと考えています。

衆議院議員、初代こども政策担当大臣

小倉 将信さん(町田市選出)

おぐら まさのぶ ●日本銀行勤務後、2012年衆議院議員選挙初当選、以後3回衆議院議員選挙に当選。22年内閣府特命担当大臣(少子化対策、若者活躍、男女共同参画)に就任し、こども政策、共生社会、女性活躍、孤独・孤立対策を担当。23年4月～9月までこども家庭庁の初代大臣を務める。著書に『EBPM(エビデンス(証拠・根拠))に基づく政策立案』とは何か―令和の新たな政策形成』(中央公論事業出版)がある。

人間の基礎となる 力を付ける教育

子育てや教育を町の重要政策としている安平町。2017年に発表した「第2次安平町総合計画」で、「将来にわたって子どもの声が地域に響き、若者・子育て世代で賑わうまち」と、今後10年間の町の方向性を示している。「子どもたちには、学力だけではなく人間力の基礎となる非認知能力^{※1}を身に付けさせたいと考えています」と安平町教育委員会事務局学校教育グループ主幹の三上泰明さんは語る。

そんな安平町の公教育の始まりは子ども園だ。町内にある子ども園のひとつ「はやきた子ども園」を訪れた。



安平町の教育行政を担う教育委員会の三上泰明さん。生まれも育ちも安平町。「『日本一の公教育を目指すまち』という言葉は、実は町に関わる企業さんから出てきたものです。自然にそれが町のスローガンになりました」

広々とした園庭の遊具はすべて手づくり。畑があり、馬もいて、子どもたちは裸足でその間を走り回っている。「子どもたちの生きる力やチャレンジする心を育てていきたい」と語るのは、園を運営する学校法人リズム学園の学園

理事で、子ども園の園長も務める福田剛さん。地域とのつながりも大切にしている、園庭の整備や遊具づくりは保護者や地域の人々とともに行った。「子どもたちを見守り、育てていくという意識が強い地域です。その力を借りながら、子どもたちが育つ環境をつくってほしい」と語る。

地域に開かれた 義務教育学校

子ども園卒園後、子どもたちが通うのは23年4月に開校した小中一貫の義務教育学校「安平町立早来学園^{はやきた}」だ。この学校が生まれたきっかけは18年に発生した北海道胆振東部地震。安平町は大きな被害を受け、中学校は使用

できなくなり、3つの小学校は被害とともに老朽化も課題となった。そこで、19年に「新しい学校を考える会」を立ち上げ、目指す学校像を町の人たちと一緒に考え、復興のシンボル事業として、すべてが一緒になる義務教育学校をつくることになった。その場には大人だけでなく、子どもたちの姿もあったそうだ。「これこそがCFCI^{※2}だなと思いました」と三上さんは当時を振り返る。

CFCIとはユニセフが進める「子どもにやさしいまちづくり事業」のこと。安平町では地震の前から「子どもの権利条約」を遵守するという意思のもと、子どもが当たり前に意見を言い、その声がまちづくりに反映されること、



はやきた子ども園の園庭にあるサイロは、町内にあった日本最古級のサイロの木材を使い、実物の3分の2の大きさに再建した

北海道安平町は 子どもの教育を 一番に考える町

北海道、新千歳空港から車でおよそ20分ほどの位置にあり、日本有数の馬産地のひとつとして知られる安平町。近年、町を挙げて子育てや教育に力を入れ、注目を浴びている。掲げるスローガンは「日本一の公教育を目指すまち」だ。



北海道安平町
<https://www.town.abira.lg.jp/>

※1 積極性や粘り強さ、リーダーシップ、モチベーションといった、学力のように数値で測れない能力のこと

※2 Child Friendly Cities Initiative。自治体が「子どもの権利条約」を遵守し、子どももまちづくりの当事者として位置付ける取り組み。日本では安平町を含めた5つの自治体が「ユニセフ日本型CFCI実践自治体」として承認されている



はやきた子ども園の園庭には、アスレチック遊具やおままごとができるテーブルとベンチ、入って遊べる小屋などがある。帽子の色が異なる(学年が違う)子どもたちが自然に混ざり合って遊ぶ



そして子どもが町の活動に活発に参加すること、安心して遊べることなどを大切にまちづくりを行ってきた。その成果を三上さんは感じたという。

「新しい学校を考える会」が求めたのは、地域とのつながりと教育効果の高さ。それを実現させるために、安平町は、学びの場づくりに知見のある(株)教育環境研究所と、新しいデジタルコンテンツを次々と発表しているチームラボ(株)と協力。チームラボは、震災後から復興ボランティアで安平町に来ていて、つながりがあった。

完成した早来学園は、約5万冊の蔵書を誇る図書室と公民館を兼ねた、町



上／馬産地として、馬に慣れ親しんでほしいと馬を飼っていて、乗馬もできる
下右／裸足にどろんこで遊ぶのはいつもの風景 下左／園長の福田剛さん。
「トイレや食事、遊びといった生活をベースに様々な経験を通した教育を心がけています」

民なら誰でも利用できる「まなびお」と同じ建物にある。学園とまなびおの間にはガラス張りの調理室があり、学校の調理実習にも、地域食堂のイベントにも活用される。この図書室は学校と共用で、休み時間になれば子どもたちがやってくる。顔認証システムがあるので子どもたちの行き来はスムーズで、セキュリティも万全だ。これらは、ITコンサルティングも行うチームラ

ポの協力で実現した。

教室はすべて形や大きさが違い、備品なども教室ごとに異なる。「画一的な教室にしないことで、9年間を旅するように過ごしてほしいという思いが込められています」と教育委員会事務局教育次長の永桶憲義さんは語る。「建物だけでなく、小学5年生以上の授業時間を同じにして教科担任制を取り入れ7年生への接続をスムーズにしています。小学校と中学校の先生が同じ職員室を使い、座席も固定していないので、自然に連携が生まれます」

町中に広がる 学びの機会

安平町の教育は、学校の外にも広がっている。こちらもきっかけは震災だった。ボランティアの方々が被災した子どもの心のケア活動を行ってくれていて、安平町はこれを継続したいと考え(株)FoundingBaseに協力を依頼した。そこから好奇心や探究心を育む社会教育を実践する「あびら教育プラン」事業が生まれ、遊びで育つ「遊育」、教えない公営塾「あびらぼ」、探究活動を行う「ワクワク研究所」、子どもたちのアイデアを形にする「ABIRA Talks」の4つの事業が行われている。それぞれ対象年齢は違うが、子どもだけでなく、大人にも関わりしるがある事業だ。たとえば「あびらぼ」は、



上／左手がまなびおで
右手奥の建物が早来学
園 左／早来学園の校
章。クリエイティブ・ディ
レクターの鎌田順也さんが
作成したふたつの案から、
子どもたちに選んでも
らった。町のシンボル、菜
の花の黄色をキーカラー
に、希望の手、希望の花
をモチーフにしている

学校での教科ではなく、学際的な分野の学びができる塾で、大人も授業を受けることができる。また「ワクワク研究所」で「大豆から味噌をつくりたい!」という声が出た時には、町内の詳しい人が講師となって子どもたちに教える「町民ワクワク師匠制度」が設けられている。

「学校で馬についての授業や、町の特産品のメロンを育てるなど、地域に関連する授業があり、その道に詳しい町の人が授業を行うこともあります。学びは学校の中だけ、と限定せず、あびら教育プランの事業と連携すればもっとおもしろいことができると思います」と三上さんは話す。

なぜ教育に力を入れるのか、あらためて三上さんにうかがった。「この町に



右／まなびおの図書室。探している本以外の本にも出合えるように、棚が緩やかな曲線を描いている。図書室からは子どもたちの姿を見ることが出来る 下／廊下と境目のないフリースペース。授業で使うこともあれば、学園祭などではイベントスペースとしても活用できる



行政と企業が手を組み、
大人も子どもも一緒に
参加した学校づくり



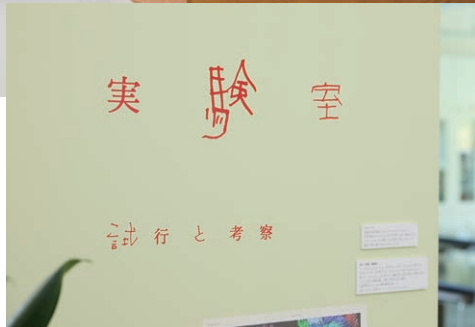
小学1年生の教室。広さは一般的な教室の倍近く、机も大きい。黒板ではなくホワイトボードで授業が行われ、プロジェクターも各教室に設置されている

は高校が少なく大学もありませんし、働く場所も多いとは言えません。一度は町外に出ることが前提にあります。しかし、この町で楽しく学校に通い、町への愛着が湧く教育を行えば、いずれ戻ってきてここで子育てしよう、この町でくらしそうと考える人が増えると思っています。教育に力を入れることは、将来の安平町の担い手を増やすことだと考えています」

この町で学ぶこと、挑戦することの楽しさを知った子どもたちは、どんな未来を切り拓いていくのだろうか。そしてそれは町にどんな変化をもたらすのだろうか。10年後、20年後が楽しみになる町だ。



上／木材がふんだんに取り入れられ、建物の構造もよくわかる。この校舎をきっかけに建築に興味を持つ子が出てくるかもしれない 右／早来学園の各教室には教室名とサブテーマが示されている。文字は子どもたちが書いたものをデザイン的に取り入れ、組み合わせている



教育委員会事務局教育次長の永桶憲義さん。「たくさんの方々の協力でできた早来学園です。開校してから多くの自治体がひっきりなしに視察に訪れています」と誇らしげだ



今治・夢スポーツは「次世代のため、物の豊かさより心の豊かさを大切にす
る社会創りに貢献する」という理念を
掲げています。環境教育を実践してい
る「しまなみアースランド」の管理や
「しまなみ野外学校」の運営などを行
うのは、理念の実現のためであり、ど
ちらも私が昔から取り組んできたこ
とだからです。

昔から関心があつた 環境教育と野外体験

環境問題に関心を持ったきっかけは、
大学生の時に読んだ『成長の限界ー
ローマ・クラブ「人類の危機」レポー
ト』でした。その後、私なりに環境問
題を勉強しましたが、世界はなかなか
変わらずもやもやしていました。その
頃、コンサドーレ札幌の監督に就任し
て「富良野自然塾」に出合いました。
主宰は脚本家の倉本聰さん。ゴルフ場
の跡地を元の森に還し、460メート
ルの道を歩いて地球46億年の歴史を体
感したりという環境教育プログラムを
実践されています。物語性があるすば
らしい内容に私はすっかり魅了され、
インストラクターの資格も取りました。
特に、プログラムの最後に置かれた
石碑に刻まれた「地球は子孫から借り
ているもの」という言葉には強く感銘
を受けました。地球は未来を生きる子
どもたちから借りているものなので、

子や孫の世代に 私たちは何を託すのか

サッカー日本代表の監督を二度務め、日本のサッカー界に大きな足跡を残してきた岡田武史さん。
2014年から愛媛県今治市で、(株)今治・夢スポーツの代表取締役会長として、
FC今治やサッカー専用スタジアムの運営に関わるとともに、
次世代に向けた環境教育や野外体験教育に力を注いでいる。

汚したり、壊したり、傷つけたりして
はいけないという、ネイティブアメリ
カンの教えです。この考え方に立てば、
今私たちが直面している多くの課題へ
の答えが自ずと見えてくると思ってい
ます。

2010年頃、たまたま今治市でア
マチュアのサッカーチームを持つ先輩
から、オオタカの巣が見つかった場所
を公園にするという話を聞きました。
軽い気持ちで「環境教育ができる自然
塾にしては？」と言ったところ「しま

史

なみアースランド」が完成。14年に私が先輩が持っていたサッカークラブに出資し、主体的にプレーできる自立した選手と自律したチームを育てるために、私が考えた指導法を使って一からサッカーチームづくりを行うと同時に、「しまなみアースランド」の管理を行い、「今治自然塾」を運営することになりました。不思議な縁です。

一方で、11年に「オカダ・インスティテュート・ジャパン（OIJ）」を立ち上げ、大自然の厳しい環境の中で野外体験プログラムを行ってきました。これは遺伝子工学の世界的権威であった故・村上和雄さんの「人間の眠っている遺伝子のスイッチをオンにすれば、可能性は無限大だ」という説に影響を受けています。これまで人間は気候変動や飢餓など過酷な状況乗り越えてきました。その経験は人間の遺伝子に刻まれているはずですが、便利で安全で快適な社会では、危機を乗り越える遺伝子は力を発揮できずに眠っています。そこで野外体験によって、眠っている遺伝子のスイッチを入れるきっかけにしたいと考えました。

最初に実施したのは、日本とカナダの大学生を2人1組にし、10日間かけてカナダの川をカヌーで下り、ロッキーマウンテンを踏破するプログラム。インストラクターも一緒ですが、「今日どこに泊まるか？」から始まり、すべてを

学生たちに任せました。言葉の壁や行程の過酷さ、野外での経験不足などでけんかが起きたり、泣き出す学生もいました。しかし10日間を乗り越えた学生たちの目の輝きは全然違っていました。これが遺伝子にスイッチが入ることなのだと感じたのです。

瀬戸内海に面し、山も川も沢もある今治市に来て、「どんな野外活動もできるじゃないか」とワクワクしました。そこでつくったのが「しまなみ野外学校」です。若い世代が対象ですが、最近では企業の研修も受け入れています。

ロールモデルのない 社会を生きるために

今、地球環境だけでなく、ITの進化やAIの出現など社会は大きく変わっています。過去のデータや事例が参考にならない、ロールモデルのない社会が訪れています。そんな社会を生きなければならない子や孫の世代に私たちが残せるものは、環境の悪化の「ロードアウン」と「適応力」、そして「共助のコミュニケーション」だと考えています。「しまなみアースランド」は環境をこれ以上悪化させないための学習の場であり、「しまなみ野外学校」は、環境の変化に対応できる強さを育む場です。

そして、先の見えない未来は1人では歩けません。ともに助け合うコミュニケーションが必要です。そこで今年完成し

た「今治里山スタジアム」を中心に、衣食住を補完しあい、田んぼや畑があり、障がいのある人が働く場があり、どんどん緑が増えていく、そんな共助が実現できる「バリヒーリングビレッジ」を構想しています。

地球は有限です。みんなが成長を続けられれば、いつかパンクしてしまうのは目に見えています。そうならない環境を子どもたちに残し、子どもたち自身の生きる力を育み、ともに助け合う社会をつくる。それを今治で実現したいんです。そう話す途方もない夢に聞こえるらしく、「また岡田のホラが始まった」と言う人もいますが、これが私たちが後世に残していかなければならないものだと思います。

おかだ たけし ● 中学から社会人までサッカー選手として活躍。その後、クラブサッカーチームのコーチを務める。1997年日本代表監督となり史上初のW杯本戦出場を実現。Jリーグのチーム監督を経て、2007年から再び日本代表監督を務め、10年W杯南アフリカ大会でベスト16に導く。14年株今治。夢スポーツに出資し、FC今治のオーナーに就任。サッカー以外に、環境教育や野外体験教育、起業家育成などの社会の課題を解決するための事業を展開している。

(株)今治。夢スポーツ 代表取締役会長

岡田 武



自然から学び、 成長の糧に

岡田武史さんが会長を務める(株)今治・夢スポーツが
取り組む環境教育や野外体験教育。
自然の中で遊び、体験することで、
子どもたちは様々なことに気づき、成長する。

今治・夢スポーツが運営する今治市
内の公園「しまなみアースランド」。

整備された公園内を少し奥に進むと、
小川が流れ、木々に囲まれた場所があ
る。自然体験型環境教育プログラム
「Morico（もりっこ）」のフィールド
だ。そこで行えるのは、川遊びや虫捕
り、崖登りや木登り、ブランコやシー
ソーなど。初めは尻込みする子もいる
が、自然をそのまま生かした遊びに
いつの間にかみんな夢中で、駆け回っ
ている。

「公園には一般向けに『今治自然塾』
の環境教育プログラムがありますが、
小さなお子さんにも自然に触れてほし
いと思い始めました」と、「しまなみ
アースランド」で環境教育のインス
トラクターを務める久保田真依さん

は語る。

森に入る前に子どもたちに伝えるの
は「森にはたくさんさんの生き物がいて、
自分たちはそこにおじゃまさせても
らっている」とこと、「昆虫など生き物
には優しく『お友だちになってね』と
接する」ということ。「今治でも自然の
中で遊んだ経験のない子が増えていま
す。環境問題の最初の一步は、人や自
然を思いやり、考えることができるか
どうか。考えれば行動につながります。
そのためにもまず生き物に触れて、興
味をもってもらいたいです」と久保田
さんは語る。

自然の中で自ら考え
行動することを学ぶ

今治から瀬戸内海周辺の海や川、山



この日の「morikko」に参加したのは、松山市内の木の実幼稚園の年長組。子どもたちは、森に入る前に森にいる生き物についての説明を聞く。森の中では虫を探したり、急な崖を元気に登ったり、川に入ってカニを探したり。自分の興味に従って自由に遊ぶ



右は「しまなみアースランド」でインストラクターを務める久保田真依さん。「前職の保育士とは違う子どもとの関わり方ができます」。中央は執行役員で、「しまなみ野外学校」も担当する木名瀬裕さん。「口を出さずに、子どもたちの成長を見守る。忍耐が必要ですが感動もある仕事です」。左は「しまなみ野外学校」ディレクターの服部真帆さん。「無人島でのキャンプなど、ここにしかないプログラムが魅力です」

しまなみアースランド

<https://s-earthland.com>



しまなみ野外学校

<https://note.com/shimanami>

をフィールドにしているのが「しまなみ野外学校」だ。プログラムは多彩で、日帰りや1泊2日のキャンプから、瀬戸内海の無人島に渡って過ごす「島の冒険キャンプ」、約130キロを歩く「瀬戸内アドベンチャー」などがある。参加者は、小学校低学年から高校生くらいまでが中心だ。「子どもたちに伝えたいのは、お互いに助け合い、協力してくらしをつくること。基本的なことは教えています。それ以外はできるだけ口を出さずに、子どもたち自身が考え、行動することを待ちます」と「しまなみ野外学校」を長く担当してきた執行役員の木名瀬裕さんは語る。

ディレクターの服部真帆さんも「自然の中という非日常の空間で、食べた

り眠ったりという日常の営みを行うには、仲間のことを考え、自発的に行動しなければものごとが進みません。それを子どもたちは学んでいきます」と話す。

これらの活動は、「子どもたちの遺伝子のスイッチをオンにしたい」という同社社長の岡田武史さんの思いから始まっている。そしてそのスイッチは大人や他人が押すことはできない、と木名瀬さんは語る。「スイッチは自分で入れるしかないですし、入れるきっかけは10人いれば10通り。私たちはそのきっかけとなる種を蒔いているようなものです。芽を出し、育てていくのは、子どもたち自身の力です」



今治市の檜原山（ならばらさん）山腹にある「ぼうしろの森」で行った「しまなみ野外学校」の「しまなみKIDS CAMP」。ぼうしろの森は野外学校の主要フィールドのひとつ。今回は市内の小学4～6年生が集まり、1泊2日で「ヒミツ基地」をつくった。ロープ、ブルーシート、ノコギリなどの工具はあるものの、それ以外はその場にあるものを利用して完成させる



次々に笑顔がつながる イオンの子育て支援

イオンは子育て世代のお客さまの様々なニーズに応え、子どもの成長をサポートするサービスを提供している。

2023年4月、イオンモール柏2階にオープンした「キッズフロア」は、子どもが楽しく遊ぶだけではなく、子育てをする親にも優しい、多彩なサービスが集まっている。親から子、子から親へ笑顔をつなげたい、という(株)イオンファントジの新しい試みだ。

平日の夕方、イオンモール柏の「キッズフロア」にある学童保育施設「楽童^{がくどう}まなべるあそび場」(以下、楽童)には、足早に子どもを迎えに行く保護者の姿がある。楽童の先生から子どもの様子を聞き、親子は楽しそうに話しながら家路につくのがいつもの風景だ。楽童は(株)イオンファントジが初めて手がける学童保育施設。楽童がある「キッズフロア」は、子どもとその家族を対象にしたサービスが集まっている複合フロアで、ほかに子ども向けの「モーリーファンタジー」や子ども向けのプレイグラウンド「スキッズガーデン」、ラウンジがある。

「弊社は『子どもたちの夢を育み、ぐえがお あふれる世界をつくる。』と

いうパーパスを掲げ、お子さま向けのサービスを提供しています。複合フロアを構想する中で、子どもたちにもっと笑顔になってもらうためには、親も



① 楽童にきた子どもたちは、宿題をしたり、遊んだり、自由に過ごす。英語の講師と一緒に遊びながら自然に英語を学べるイングリッシュタイムがあり、希望すればピアノやアート、学習などの習い事もできる ②③ 楽童に通っている大村帆花さんと母の仁美さん。学校の学童保育と併用していて、週3回利用している



体を動かすアクティブコーナーや、ごっこ遊びができるなりきりタウン、世界中から厳選した知育玩具で遊べるトイコーナー、クリエイティブな遊びを体験できるアートボンなどがある「スキッズガーデン」。3歳～小学校2年生までは子どもだけで遊ぶことができ、楽童に通う子どもは、学童生活のアクティビティの一環として、無料で遊ぶことができる



(株)イオンファンタジー
エデュテインメント事業開発本部
業態開発グループ
GMS複合・大型区画プロジェクトマネジャー

鮎澤 大輔

あゆさわ だいすけ ●大学で幼児教育を専攻。アミューズメント施設運営企業(株)ファンフィールドに入社し、栃木県、群馬県、東京都などで店長を歴任。2015年(株)イオンファンタジーと合併し、モーリーファンタジーのストアマネジャー、支配人などを経て21年から現職。



ラウンジには、子育て関連の書籍や雑誌が備えられ、ほっとできる空間だ

笑顔になることが必要なのではと考えました。親から子へ、子から親へ、親子の間で『笑顔の連鎖』を起こすために、親の子育ての負担を軽減し、時間や心にゆとりが生まれるサービスを提供したいと考えています」とキッズフロアをプロデュースした同社エデュテインメント事業開発本部業態開発グループの鮎澤大輔は語る。

フロアの構想を練るにあたり、子育て世代へ調査を実施したところ、学童保育施設へのニーズが高いことがわかった。そこで、学童保育施設を1都3県で運営し、行政や企業からの委託も受けている(株)ウィズダムアカデミーと提携して楽童をオープンした。利用者の大村仁美さんは、自宅から近いことと、充実した内容に魅力を感じ、4月から娘の帆花(ほのか)さんを通して英語を学ぶカリキュラムや習い事もできる点が気に入っています。娘は国語と算数を学ぶプログラムが楽しいようです。楽童の日は、宿題もしっかりと終わってくるので、親としては安心ですね」

楽童に通う子どもは、隣接する「スキッズガーデン」で遊ぶこともできる。鮎澤は、「楽童の英語の先生が子どもたちと一緒に遊ぶことで、子どもたちは

働く人の育児と仕事の両立を支える

イオングループでは、出産・育児休職からのスムーズな復職や子育てと仕事の両立をサポートするために、イオングループが運営する31か所の事業所内に「イオンゆめみらい保育園」を設置している。イオングループ各社の従業員やイオンに出店している専門店企業で働いている方、そして地域の子育て世代の方々が主に利用しており、小売業やサービス業に携わる利用者の働き方に対応するために、原則365日

開園で、保育時間も午前7時から午後10時までとなっている。設置されている事業所によっては、病後児保育(病気の回復途中だが、通常の集団保育は難しい子どもを預かる保育サービス)や一時保育にも対応している。

さらに、イオングループの事業所内保育園と、提携している企業主導型保育園「ニチキッズ」(ニチイ学館運営)91園を合わせれば、全都道府県に保育枠を確保していることになる。利用者からは、職場に近いので「送り迎えが楽」「子どもに何かあった時に対応しやすい」「職場の繁忙に合わせて勤務できる」など好評だ。



自然に英語が身に付きます」と語る。またラウンジはお迎えの前に保護者がひと息入れられる場所にもなっている。大村さんもよく利用していて、「仕事の気分を切り替えるのにいいので、お茶を飲んだり、雑誌を読んだりしています」と話す。

今後は、予防接種など未病対応を中

心にしたクリニックが開業し、サービスがより充実する。「キッズフロア」の人気も上々で、他の地域からも「同様のものを設けたい」とオファーがきていると鮎澤は言う。「地域によって求められるサービスは異なります。しっかりと地域のニーズを捉え、それに応えられるものを提供していきたいです」

大いなる哲学を持ち、
エシカルな食の場を提供する

Sustainable Restaurant

Vol. 19



「きじま」を代表する「海幸盛(うみさちもり)」は10種類以上の旬の魚を堪能できる。中でもイカの活け造りは生簀から揚げたばかりで透明な身が美しい。この日のイカは山口県・角島の剣先イカ。ほかにアカハタ、アワビ、ボタンエビ、カマス、トビウオなどが並ぶ



前菜盛り合わせ。素材の中心は魚介類だが、自然放牧で育てられた鹿児島県の里山牛を使ったローストビーフも味わえる



店内のイメージは「蔵」。明治時代のどっしりとした重厚な蔵の扉や繊細な細工の建具を使いつつ、アンティークの照明などもあり横浜のハイカラな雰囲気も出ている



「きじま」は水産物の水揚げ以降の加工・流通過程の管理認証、CoCを取得。また、日本の和食店では初のFSC®プロジェクト認証※3を取得した



※1 水産資源や環境に配慮し、適切に管理された持続可能な漁業で獲られた水産物へ与えられる認証

※2 環境と社会への影響を最小限にした責任ある養殖の水産物へ与えられる認証

※3 一度しか作らないものや連続する類似プロジェクトについての認証で、たとえば、建造物、家の一部、ボートの認証などが挙げられ、土木工事やイベントのインフラも対象となる



ASC認証を受けた宮城県の銀鮭といくらの炊き込みご飯。脂ののった銀鮭の旨みといくらのコクがご飯と一体となっている

「きじま」は創業当初から全国各地の漁師さんたちとつながり、新鮮な食材を提供してきた。注文を受けてから生簀の中のイカや魚、貝、伊勢海老などをさばく「活け造り」は、きじまの看板メニュー。これを目当てに訪れる人も多い。「おかげさまで、お食い初めなどの人生の節目にも選んでいただけたお店になりました」と「きじま」の事業戦略室長の杵島弘晃さんは

言う。「ただ、そうした席に添加物の入ったお料理はふさわしくないのではという声が社内でも上がり、議論を重ねました。その結果、調味料から食材までを見直しました」2年半かけて調味料は無添加のものに代え、2019年からは「海のエコラベル」と言われるMSC認証※1やASC認証※2の魚介類の利用を始め、今では養殖魚はすべて認証を取得したものを使っている

る。店長の岩谷和樹さんも「きじまがこれまで提供してきた味を、子や孫の代まで残すのは飲食店の使命だと思っています。料理に限らず私たちにできることはすべてやっていく、そうした気持ちで取り組んでいます」と語る。

和食を通して豊かな海の恵みを子や孫に受け継ぐ

2020年6月、横浜・みなとみらいにオープンした「日本料理きじま」。1980年の創業以来、横浜を中心に展開する和食店「きじま」の店舗のひとつで、サステナブルに徹底的にこだわっている。



みなとみらい店の店長を務める岩谷さん。「きじま」に入って13年のベテランで、ソムリエの資格も持つ

きじま みなとみらい店

④横浜市中央区北仲通5-57-2

北仲ブリック&ホワイト 2F

☎045-264-8006

⑤平日11:00~15:00(L.O. 14:30)、

17:00~22:00(L.O. 21:00)

土・日・祝日11:00~22:00(L.O. 21:00)

<https://kijimagroup.co.jp/>

※最新の情報はHPにてご確認ください



「春日部おもちゃの病院」のメンバーのみなさん。最後列の左から2人目が代表の大滝敏さん。この日は「春日部第1児童センター エンゼルドーム」で開院していた。テーブルの上にあるのは修理中のおもちゃ

壊れたおもちゃ、私たちが治します!

「壊れたおもちゃを無料で治します」。そんな呼びかけで、地域の児童センターやイオンモールの一角を使って「おもちゃの病院」を“開院”しているのが、埼玉県春日部市のボランティア団体「春日部おもちゃの病院」だ。週に1回のペースで開院している。

スタートしたのは2004年。現在のメンバーは70代を中心に24名で、そのうち4名が女性だ。団体の設立者で代表を務める大滝敏^{たかし}さんは立ち上げのきっかけについて、「もともと市内に障がいがある子もない子も楽しくおもちゃで遊べるようにと作られた『おもちゃ図書館』があり、そこのおもちゃを修理できる人を探していると知って、参加したのが始まりです」と話す。大滝さんは小学生の頃から模型作りや機械いじりが好きだったそうで、「自分

にならできるかも」とトイ(おもちゃ)ドクターになることを決めた。

「今いるメンバーもだいたい同じような感じで、子どもの頃、家の時計を分解してはまた組み立てて遊んでいた、というような人が集まっています(笑)。女性のメンバーにはぬいぐるみや人形の縫製修理などを担当してもらうことが多いです。みんな、手を動かしたり、機械いじりが好きなので、修理依頼は大歓迎です。また、不要になったおもちゃを引き取って、その中の使える部品を修理用パーツとして再利用したりもします」と大滝さん。

「私たちでは修理できないこともあるのですが、『音が鳴らなくなった』というような故障は中で断線しているだけのケースも多く、ハンダ付けで治せます」。その場で修理できない場合は預かって、時間をかけて作業を行う。

おもちゃが無事治り、それを渡す時に依頼者が見せてくれるうれしそうな笑顔にやりがいを感じると大滝さんは言う。

「おもちゃを持って来るのは子どもから高齢者まで幅広い年齢の方々です。高齢者は会話ができる電子人形を持ってこられたりしますよ。『ものを大切にしたい』という思いを持っている方は今もたくさんいます。その気持ちに応えていけるようこれからも活動していきます」と大滝さんは教えてくれた。



おじいさんとお孫さんが壊れたおもちゃと来院。まずは受付で症状を聞き、お預かりとなる



修理が完了したキャラクター型の目覚まし時計を受け取りに来た親子(右の2人)と大滝さん。目覚まし音が鳴らなくなっていたが復活した



毎月11日の「イオン・デー」にレジで発行される黄色いレシートを、応援したい地域の団体のBOXに投函。集まったレシートの合計金額の1%相当の品物をイオンが該当団体に寄贈します。支援が必要な団体と、応援したい地域のお客さまをつなげる仕組みです。



「イオン 幸せの黄色いレシートキャンペーン」では文房具などの寄贈を受けている。特に、様々なタイプのものが必要となる電池に多く活用されている

イオンは
パラスポーツを
応援
しています。



デフ陸上のアスリートで、ライフネット生命保険株式会社の社員でもある岡部祐介さん。同社初のアスリート社員として2016年に入社。陸上をメインに一般業務も担当している

デフリンピック、日本で初開催。十種競技で出場を目指す

2025年11月、東京で聴覚障がい者の国際スポーツ大会・デフリンピック夏季大会(デフ=Deafは英語で「耳が聞こえない」という意味)が開催される。オリンピック・パラリンピック同様4年に1度、夏季と冬季に開催される大会で、第1回は1924年にフランス・パリで開催。東京での大会は100周年の記念大会となり、日本初開催となる。世界70～80か国・地域から約3000人の選手が参加する予定だ。

そのデフリンピックに、岡部祐介さんは陸上の十種競技で出場を目指している。生まれつき「両側感音性難聴」の障がいがあり、耳が聞こえない。陸上はろう学校に転校した中学2年から始め、2013年ブルガリア、17年トルコでのデフリンピックに4×400メートルリレーなどで出場。22年秋から十種競技に転向した。

「身体の欠損ではないため、デフ陸上と健常者の陸上で競技方法やルール上の違いはありません。ただ、音が聞こえないということはスタートのピストル音が聞こえないということです。光で

合図をしてくれる『スタートランプ』があればいいのですが、通常は審判に体をたたいもらったり、旗による合図を見たりします。小学生の頃の徒競走では、周りが走り出すのを見てから走るの、どうしても勝てずに悔しい思いをしました」と話す。

現在取り組む十種競技は、100メートル走や棒高跳び、砲丸投げなど「走る」「跳ぶ」「投げる」種目を計10種、2日間で行い、合計得点を競うものだ。「選手ごとに得手、不得手の種目があるので、どこで得点を伸ばすかなど戦略を練ります。そんなところにも注目すると観戦がより楽しめると思います」と岡部さん。

デフリンピックには海外の選手も大勢参加する。応援の方法を尋ねると、「タオルを振ってくれたり、『がんばって』というような簡単な手話で応援していただけるととてもうれしいです。競技場で選手と観客席の距離が離れ、声が届かないときでも、身振りや手話の応援は見えるんです。実は声援よりも遠くまで応援の気持ちを伝えることができるんですよ」と教えてくれた。

「私が活躍することで、耳が聞こえない子どもたちに『デフ陸上』をより広く知ってもらえると思っています。彼らに夢や希望を与えられる存在になれるようがんばっていきます」と目標を話してくれた。



上／陸上トラック競技で使われるスタートランプ。スタート地点の地面に置かれ、下を向いたクラウチングスタイルのまま、合図を見ることができる 右／手話でインタビューに答える岡部さん。手話以外でも、「身振り手振りや、筆談でも会話はできるので、積極的にコミュニケーションをとってもらえるとうれしい」と話す



岡部さんは1987年生まれ、秋田県出身。身長186センチ。現在、専門とする十種競技とは、1日目に100メートル、走り幅跳び、砲丸投げ、走り高跳び、400メートル、2日目に110メートルハードル、円盤投げ、棒高跳び、やり投げ、1500メートルを行い、それぞれの記録の合計得点を競う競技

豆

腐チゲ、キムチチゲなど韓国で鍋料理という「チゲ」

を連想する方が多いと思います。「チゲ」は鍋で作りますが、鍋ごと出すとは限らない料理なので、実際には日本の汁物のイメージでしょうか。これに対して「ジョンゴル」は日本のすき焼きと同じように、口の広い浅型の鍋を使い、生の食材を入れて煮ながら食べる鍋料理を指します。ただ、すき焼きと違って、下ごしらえした食材をきれいに並べ、調味料を加えてから火にかけて煮ます。

もともと宮廷料理だったので見た目の美しさにこだわるのも特徴です。そんな背景も踏まえつつ、家庭でも簡単にできるように考えたのがこのキョンファ流セゴギキムチジョンゴル。キムチ、牛肉、豆腐……と順に置いていくだけで簡単にきれいに盛り付けられます。すき焼き鍋や浅い鍋がなければフライパンでも構いません。一人分なら量を減らし、卵焼き用の鍋で作ることもできます。ヤンニョムを多めに作っておいて肉や具材を足しながら食べてもいいですし、キッチンで煮込んでから食卓に運んでもよいでしょう。

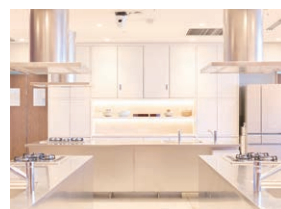
辛いのが苦手な方はヤンニョムのコチュジャンを減らし、その分みそを増やして調整してください。とにかくご飯がすすむので、多めに炊いておくことをお勧めします。

イオンが取り組む「食と健康」シェフパートナーズ料理塾より

家庭で再現！シェフのヘルシーレシピ 19

セゴギキムチジョンゴル（牛肉と豆腐のキムチ鍋）

「セゴギ」は日本語で牛肉、ジョンゴルは鍋という意味。牛肉、豆腐、キムチを醤油やコチュジャンを使った合わせ調味料、ヤンニョムで煮込む韓国風のすき焼きです。浅めの鍋を使い、食材を美しく並べて見た目も楽しみながらバランス良く栄養をとることができるのも特徴。手軽にできる冬のおもてなし鍋を、韓国料理の第一人者 ジョン・キョンファさんに教えてもらいました。



KOREAN COOKING
キョンファスタジオ
東京都府中市府中町1-7-2
さくら食品館4階
☎042-368-8887
http://www.krcook.com



KOREAN COOKING
キョンファスタジオ

料理家 ジョン・キョンファさん
同料理教室主宰。四十数年にわたる朝鮮半島の食文化の普及に尽力。韓国ドラマ「宮廷女官チャングムの誓い」では日本語訳版の料理監修も担当した。「きょうの料理(NHK)」をはじめ、テレビ、雑誌、講習会などを通しておいしくヘルシーな韓国料理をわかりやすく紹介。著書多数。



具材の大きさを揃えて並べるのがポイント。牛肉は折りたたんで煮込むと食感も良くなります

セゴギキムチジョンゴル（牛肉と豆腐のキムチ鍋）

材料（2〜3人分）

牛薄切り肉300g、キムチ300g、豆腐1丁、玉ねぎ1/2個、長ねぎ1本、えのき1パック、春菊1/2束、水約300cc、ごま油適量 [ヤンニョム用調味料] しょうゆ大さじ5、コチュジャン大さじ2、砂糖大さじ2、すりごま大さじ1、みそ大さじ1/2、おろしにんにく小さじ1、粉唐辛子少々

作り方

①キムチ、豆腐（厚さは1cm）を4〜5cmの長さに切り、牛肉は三つ折りぐらいにし、豆腐と大きさを揃える。

②玉ねぎはくし切り、長ねぎは斜め切り、えのきは根元を切り落とす。春菊は4〜5cmの長さに切り揃え茎と葉に分けておく。③ヤンニョム用の調味料をすべて混ぜ合わせる。④浅鍋にごま油をひき、玉ねぎを平らに敷いてからその上にキムチ、牛肉、豆腐を順に鍋の中央に2列に並べる。⑤牛肉の上に③のヤンニョムを適量かけ、残ったヤンニョムは水と合わせて鍋の端の方から注ぐ。⑥鍋の両側に長ねぎ、えのき、春菊の茎を並べて火にかける。⑦ぐつぐつと沸いて肉の色が変わったら春菊の葉をのせてできあがり。

